様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３３２００４３

研究課題名（和文）模倣と超越―美術における学習と創造―

研究課題名（英文）Imitation and Transcendence: Learning and Creation in the Fine Arts

研究代表者
宮廻　正明（MIYASAKO, MASAAKI）

東京藝術大学・大学院美術研究科・教授

研究者番号：４０２７２６４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　13,500,000円、（間接経費）　4,050,000円

研究成果の概要（和文）：日本絵画の模本および模写史について調査研究を行い、美術における模写の意義を再評価するとともに、新たな模写技法の開発を行った。特に質感を伴う絵画の複製制作に関しては、実技的研究を通してデジタル技術と日本画の伝統技法を融合した新技術を開発し、特許を取得した。これらの技術は壁画文化財をはじめとする様々な基底材の質感を再現した複製制作、展覧会や文化施設での展示に活用されている。また、模写史や模写手法に関する研究成果は2014年度に書籍として出版することが決定している。

研究成果の概要（英文）：We researched exemplar of Japanese painting and a history of reproduction. We not only revalued significance of reproduction in the fine arts and but also developed a new technique of reproduction. Especially, concerning reproduction of painting with feel of a material, through practical research we developed a new technique which was united digital technology and traditional technique of Japanese painting. As a result, we got patents about reproduction.
These techniques have been utilized in reproducing feel on wall painting of cultural assets, various bases of material, exhibitions and displays at cultural facilities. In addition, it is decided that the research results about a history of reproduction and a method of it will be published in the current year.

研究分野：芸術表現

科研費の分科・細目：芸術一般

キーワード：日本画　美術教育　保存修復　文化財保存学　技法材料　博物館学　模本　複製

１．研究開始当初の背景

日本の美術は伝統的に、模倣により継承され、模倣の上に創造されてきたといってよい。研究代表者は日本画家として模写教育や文化庁主導の模写事業に長年携わってきたが、その中で近年、表現・文化としての「模倣」が本来の意義を失いつつあるという問題に直面してきた。明治初め、廃仏毀釈に伴う文物の破壊や海外流出への対策として国家レベルでの模写事業が始まり、模写の目的は“学習”より“保存”が先行した。絵画の評価も文化財保存の機運と共に原本を至上とする意識が高まり、「模写」は代替品あるいは記録資料として扱われる傾向が強まった。しかし、本来「模写」は、劣化を免れない原本と成り代わってその信仰や芸術性を次世代に伝える東洋の伝統文化であり、原本の内容的な意義や精神を継承することがその本質的意義である。模写の目的は文化財保存と芸術家育成に二極化したと言えるが、単なるレプリカ作成や形式的なカリキュラムとしての模写教育に終始しない為には、芸術表現・文化としての「模倣」の精神性と創造性を見直し、現代の問題に対応した新たな「模写」の役割について再考する必要がある。そうした模写教育現場における問題を背景そして、現代の文化財保存と模写教育の両分野に主導的に関わる立場から、「模倣」という文化の本質について再度見直す必要性、これからの「模写」がどうあるべきかを提示するため、本研究に取り組むこととした。

２．研究の目的

本件は研究の焦点を日本絵画に絞り、古画調査および模本調査を通して美術の創造に「模倣」がどう関わってきたかを整理することによって、「模倣」がときに原本を“超越”し、「創造」を生み出してきたという史実を明らかにする。また、現代におけるアジア・西欧の模写教育の実情を調査し、近代日本の模写教育を相対化することで、芸術家育成に対する重要性を検証する。

日本の美術・伝統文化は常に「模倣」から生まれ、現在まで継承されてきた。本研究は、信仰・学習・保存など多様な目的により行われてきた「模倣」の“表現”としての価値を見直し、現代の文化財教育と芸術家育成に果たす「模倣」の可能性を提唱する。さらに、日本画の実技を専門とする立場から、新しい模写の技術開発を行い、文化財の保存と活用につなげる。

３．研究の方法

（１）国内の模本調査

模写は芸術表現や作画の技巧として捉えられることが少なく、各地にかなりの数量で現存する多用な主題の模本の網羅的・包括的な作品調査は、これまで十分になされてこなかった。そこで、現存する古画・近代日本画の模本の調査・分類を行い、模倣・模写通史構築の為の基盤とする。

具体的には東京芸術大学が所蔵する 5048 件の東洋画模本から調査に着手し、模本の分類、記録撮影作業を進める。技法材料、模写の目的、原本との相違点とその理由などについて実技的な観点から分析を行い、時代別の特色や模倣意識の変化について検討する。その時代の日本画観を現す「模本」の調査によって、各時代において模写教育が画家・画学生たちに与えた理念と価値観の変遷を検証する。模倣が同時代の絵画創作にどう影響したか、また、文化・精神の継承の為に行われていた模写がいつからどのような経緯で記録・保存の為の模写に変質したのかを明らかにする。

調査した模本は撮影し、画像データを併せて保存する。画題、制作年代、作者、当時の指導者、材料・基底材・寸法（原本との違いの有無）、これらの基本情報に加え、現状観察、表現上の特徴・線描観察、模写作者の創作との比較など、観察者の意見を出し合い記録する。

（２）アジアにおける模写教育の実情調査

中国、韓国、台湾で現在行われている模写教育のカリキュラム、手法、目的等について調査を行う。各国における国画のアイデンティティーと模写教育・文化行政の関連性について考察し、現代の東洋絵画における模写の位置づけ、各国の模写教育が抱える問題点を確認する。また、模写制作を通した国際貢献や国際理解など、現代における模写の新たな役割を検討する。

（３）模倣と創造の関係性の検証

（１）（２）の調査結果の分析と共に、実際の模写制作も行い、模倣と創造の関係性を具体的に探る。作業は代表者、分担者が指導し、大学院生が中心となって調査対象作品の部分模写や、様々な目的に応じた手法の模写を制作する。「模倣」の表現性を見直し、その本質的意義を明らかにした上で文化財保存におけるデジタル技術への依存問題等を指摘し、「模写」の現代的なあり方について検討する。単に図像を写し取るだけでなく、より積極的に文化財の共有・鑑賞教育に活用できる模写の方向性を模索する。研究成果についてはシンポジウムを開催し、広く一般にも公開する。

４．研究成果

平成 23 年度は大学美術館所蔵の模本整理及び調査、模本資料収集、海外調査（中国・韓国・台湾）を中心に研究を進めた。第一回ワークショップを開催し研究成果発表を行う他、代表者・分担者がそれぞれ学会発表、論文発表、講演を行った。模写の実技的研究としては従来の模写技法とデジタル技術を融合した新たな手法（特許 4559524 号）により、壁画表面の質感まで再現した高精度の複

製制作に取り組み、高句麗古墳壁画江西大墓の複製を完成させた。敦煌石窟壁画、陝西省唐墓壁画についても今後複製制作を行うため、現地調査・基礎データ収集を行った。また、アジアにおける模写教育の現状調査のため中国・敦煌美術研究所、中央美術学院、韓国・ソウル大学、聖神女子大学、台湾・台湾師範大学、東海大学等、主要な芸術大学や研究機関を訪問し、視察、意見交換を行った。ワークショップでは模写史の概略をまとめ「模倣」の“表現”としての価値を見直し、模写の新技術の紹介と海外調査の報告を行った。研究成果として作品を展示することで国内外の関係機関から反響があり、模写の現代的なニーズを再確認することができた。

平成 24 年度は前年度に引き続き、基底材の質感を伴った模写の制作技法開発に中心的に取り組んだ。壁画模写に関しては高句麗古墳壁画江西大墓および法隆寺金堂壁画を研究対象とし、フィルム写真や印刷図版のデジタル処理による鮮明化、壁画表面のマチエールを再現した和紙への印刷、手彩色による仕上げの技法について研究を深めることができた。高句麗壁画については天井部分を除いた石室を実物大で復元し、触れることができる文化財として平成 24 年 3 月～6 月、平山郁夫シルクロード美術館にて展示、4 月にはシンポジウムを開催し 200 名以上の参加者が集まった。また、壁画複製の課題のひとつである機動性の解決の試みとして、同壁画の模写を屏風形式に装丁し、移動展示や教材、室内装飾としての活用の可能性を模索した。壁画の他には板地に描かれた絵画について平等院鳳凰堂の扉絵を研究対象とし、和紙を基底材としながら原本の板目をトレースしレイヤーとして図像部分の模写に重ねることで、質感の再現に成功した。この技法については既に特許を出願していたが、平成 24 年 12 月に特許第 5158891 号「素材の製造方法及び絵画の制作方法、素材及び絵画、建築用材料」の名称で特許を取得した。外部機関との交流としては、文化財保存学科を設置する他大学を訪問し、文化財の科学調査技術および分析機器の視察、意見交換を行った。また、敦煌研究院から樊錦詩院長ら 5 名の研究者を招き東京芸術大学でシンポジウムを行い、壁画模写の共同研究に向けて協定締結を進めた。

平成 25 年度は実技的研究として法隆寺金堂壁画、敦煌石窟壁画の質感再現を中心に、壁画の高精細複製技術開発を継続した。絵画制作における伝統的分業制を複製制作に導入する手法や、欠損部のデジタル復元手法について研究に進展があった。また、東京芸術大学大学美術館所蔵品や同大学が調査データを有するオルセー美術館の所蔵品を研究対象として、油彩画の複製技術開発にも取り組み、基底材のマチエール作りと印刷技術の融合手法に成果を上げた。開発された複製技術は 2013 年 9 月に学内で開催されたシンポジウム「日本の未来を拓く芸術文化外交」会場や、筑後広域公園芸術文化交流施設「九州芸文館」等における壁画複製展示に活用された。初年度より継続してきた東京芸術大学大学美術館所蔵の模本資料整理については分類・記録作業をほぼ完了し、特に近代の壁画模写に関しては使用された顔料の蛍光Ｘ線分析等の光学的調査を行い、同大学院修士修了展において院生が中心となり調査報告を行った。なお、本研究により進めてきた模写史と模写手法の調査研究成果については、2014 年に書籍として発行することが決定している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 12 件）

① 荒井経、染谷香理「〈資料〉近代日本画の材料（支持体篇）」『東京芸術大学美術学部紀要』第 51 号、査読有、2013、pp.47-74
② 古田亮「大正初年における宗達の再評価をめぐって」『美術フォーラム 21』28、査読無、2013、pp.85-90
③ 荒井経「国絵図復元—巨大絵図制作の技術—」『東京芸術大学美術学部紀要』第 50 号、査読無、2012 年、pp.5-15

〔学会発表〕（計 14 件）

① 宮廻正明「芸術文化交流の現場から」、シンポジウム「日本の未来を拓く芸術文化外交」(パネリスト)、2013 年 9 月 14 日、東京芸術大学
② 宮廻正明「文化財活用の最前線」、シンポジウム「模倣と超越—美術における学習と創造」(招待講演)、2012 年 4 月 28 日、平山郁夫シルクロード美術館
③ 荒井経「東京芸術大学の保存修復研究と教学実践」巻軸絵画保存修復検討会（招待講演)、2012 年 4 月 12 日、中国美術館（北京）

〔図書〕（計 6 件）

① 宮廻正明他、世界文化社、『日本画　名作から読み解く技法の謎』、2014（発行確定)、224 頁
② 古田亮監修、平凡社、『岡倉天心：近代日本美術の師（別冊太陽　日本のこころ 209)』、2013、184 頁
③ 荒井経他、東京文化財研究所、『横山大観《山路》』、2013、99 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計１件）

名称：素材の製造方法及び絵画の製作方法、素材及び絵画、建築用材料
発明者：宮廻正明、荒井経
権利者：国立大学法人東京芸術大学
種類：特許
番号：特許第 5158891 号
取得年月日：24 年 12 月 21 日
国内外の別： 国内

〔その他〕
ホームページ等
東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復日本画研究室ウェブサイト
http://www.geidai.ac.jp/labs/hozonnihonga/

６．研究組織
(1)研究代表者
宮廻　正明（MIYASAKO,Masaaki）
東京芸術大学・大学院美術研究科・教授
研究者番号：40272645

(2)研究分担者
荒井　経（ARAI,Kei）
東京芸術大学・大学院美術研究科・准教授
研究者番号： 60361739

古田　亮（FURUTA,Ryo）
東京芸術大学・大学美術館・准教授
研究者番号：20259998

鴈野　佳世子（KARINO,Kayoko）
東京芸術大学・大学院美術研究科・教育研究助手
研究者番号：40570065
（平成 24 年度より連携研究者）

(3)連携研究者
有賀　祥隆（ARIGA,Yoshitaka）
東京芸術大学・大学院美術研究科・客員教授
研究者番号：20133613